

聖書：創世 40：1～23

説教題：忘れられたヨセフ

日時：2024年5月26日（朝拝）

前の 39 章でエジプトへ売られて行ったヨセフはファラオの廷臣で侍従長のポティファルという人の家で奴隷として働くようになりました。その彼と主がともにいてくださり、彼のすることすべてが成功するのを見てポティファルはヨセフを信頼し、ついには自分の家と全財産を彼に任せるまでになりましたが、ポティファルの妻がヨセフに情欲を抱き、自分と一緒に寝るように何度も誘惑しました。その誘いに屈しなかった結果、ヨセフは無実の罪を負わされて牢屋に投げ込まれてしまいました。踏んだり蹴ったりの扱いを彼はまたしても受けました。しかし驚くべきことは、そのような扱いを受けながらもヨセフは腐ってしまわなかったことです。監獄の中でも主がともにいてくださり、彼は監獄の長からも信頼を勝ち取り、ついにはすべての囚人たちと、そこで行われるすべてのことを管理する者とされました。その彼に今日の章で新しい出来事が起こります。

ヨセフが監禁されているのと同じ監獄にエジプト王の献酌官と料理官が入れられました。主君であるエジプト王に対して過ちを犯したからでした。献酌官は、後で出て来ますが、杯に飲み物を注ぐ人で、料理官は文字通り、王が食べるご馳走を準備する人です。いずれも王の側で仕える特別な役人で、彼らが犯した過ちは重大なものとされ、このような処置を受けることになったのでしょう。彼らは侍従長の家に拘留されました。そして 4 節を見ると侍従長はヨセフを彼らの付き人にしたとあります。この侍従長とは前の章に出て来たポティファルのことです。その彼がヨセフを役人たちの付き人にしたということは、やはりポティファルはヨセフを黒だとは思っていなかったことを暗示するのかもしれませんが。訴える妻の手前、ヨセフを監獄に入れたものの、やはりヨセフは信頼すべき器であることを見て取ったのでしょう。ヨセフは二人の役人の世話をすることとなりました。

まず私たちがここに見るのはヨセフが付き人として二人の人を良く気遣っていたことです。6 節に「朝、ヨセフが彼らのところに来て、見ると」とあります。ヨセフは他人の様子を良く見えています。普通、ヨセフのような状況にある人なら、牢屋の中でどんな姿を示すでしょうか。彼は不当な扱いを受けています。濡れ衣を着せられてここにいます。そういう人は他人への怒りや自己憐憫で心が一杯になり、とても他人のことになど気を

配ることができない状態になって普通ではないでしょうか。ところが彼は7節で「なぜ、今日、お二人は顔色がさえないのですか」と尋ねます。ここにヨセフがどのような心の状態にあったかを私たちは伺い知ることができます。彼はともにおられる主によって支えられていました。このような環境下でも自分自身が主によって慰めを受け、平安と満たしをいただいていたので、周りの人にも心を配り、優しい言葉をかけることができたのです。彼が神との親しい交わりに生きていたことは8節からも分かります。彼は二人の役人が夢の意味が分からないと悩んでいたのを知って、こう言います。「解き明かしは、神のなさることではありませんか。」 このように「神がしてくださる」とすぐ言えたということは、彼が日々監獄の中でも主との生ける交わりに生きていた証拠です。彼は主によって自らが支えられ、慰めと力を受けている者として、主が自分にしてくださっていることを映し出すようにして、他の人に心に向け、その重荷をいくらかでも負い、助けの手を差し伸べる働きに身をささげることができたのです。

さて、この二人の役人の問題は同じ夜にそれぞれが夢を見て、その意味が分からないでいたことでした。エジプトでは夢によって神が何かを告げるという考えが一般的にあって、その解き明かしを職業とする人たちが多くいたようです。しかしこの二人は監獄の中に拘留されていて、そのような人々を呼び寄せることができません。そこで意味が分からず、すぐれない顔色をしていたのでしょう。ヨセフは「解き明かしは、神のなさることではありませんか」と述べて、「さあ、私に話してください」と言います。そこで二人の役人たちはヨセフに自分たちが見た夢を話します。

一人目の献酌官は次のように言います。9～11節：「献酌官長はヨセフに自分の夢を話した。『夢の中で、私の前に一本のぶどうの木があった。そのぶどうの木には三本のつるがあった。それは、芽を出すと、すぐ花が咲き、房が熟してぶどうの実になった。私の手にはファラオの杯があったので、私はそのぶどうを摘んで、ファラオの杯の中に搾って入れ、その杯をファラオの手に献げた。』」 これに対するヨセフの解き明かしは明快でした。12～13節：「ヨセフは彼に言った。『その解き明かしはこうです。三本のつるとは三日のことです。三日のうちに、ファラオはあなたを呼び出し、あなたを元の地位に戻すでしょう。あなたは、ファラオの献酌官であったときの、以前の定めにしたがって、ファラオの杯をその手に献げるでしょう。』」 ここには少しのあいまいさもありません。三本のつるは三週間や三カ月あるいは三年間を意味したとしてもおかしくない私たちには思われますが、ヨセフははっきりと三日間を指すと言います。そう言い切れるのは

やはり特別な賜物が彼には与えられていたからでしょう。これを聞いてもう一人の役人、料理官長もヨセフに自分の夢を話します。16～17 節：「料理官長は、解き明かしが良かったのを見て、ヨセフに言った。『私の夢の中では、頭の上に枝編みのかごが三つあった。一番上のかごには、ファラオのために、ある料理官が作ったあらゆる食べ物が入っていたが、鳥が私の頭の上のかごの中から、それを食べてしまった。』」 これに対してヨセフは答えます。18～19 節：「ヨセフは答えた。『その解き明かしはこうです。三つのかごとは三日のことです。三日のうちに、ファラオはあなたを呼び出し、あなたを木につるし、鳥があなたの肉をついばむでしょう。』」 内容はとても厳しいものでした。しかしヨセフは自分勝手に薄めず、主が示されたことを忠実に取り次ぎます。受け入れやすいことばかりでなく、厳しいメッセージも、それが主から出ていることであれば、その通り取り次がなければならぬことを私たちはこのヨセフの姿からも教えられます。果たして結果はどうだったでしょう。三日後にヨセフの言った通りになったことが 20～22 節に記されています。献酌官長は元の地位に戻され、料理官長の方は死刑に処され、木に吊るされました。こうしてヨセフの解き明かしは全く正確であったことが明らかにされました。

さて今日の章のポイントは二人の役員がそれぞれどうなったかということ以上に、ヨセフはこの二人との出会いを通してどうなったのかということの方にあるでしょう。ヨセフは献酌官への解き明かしをした後、彼にこう言いました。14～15 節：「あなたが幸せになったときには、どうか私を思い出してください。私のことをファラオに話して、この家から私が出られるように、私に恵みを施してください。実は私は、ヘブル人の国から、さらわれて来たのです。ここでも私は、投獄されるようなことは何もしていません。」 ある人はこれは人間により頼もうとする、神への信仰とは調和しない姿だと考えるかもしれませんが。しかしそうではないと思います。ヨセフはもちろん神にこそ信頼していますが、献酌官への解き明かしをし、彼が牢屋から出てエジプト王の側での働きに戻ると知った時、この彼を通して自分も救われることが神の御心ではないかと思ったのです。この献酌官は主が私を監獄から救い出すために遣わして下さった器ではないかと。ヨセフは決して神から目を離して人間により頼んだわけではありません。神に第一の信頼を置きつつ、その神が彼を私のために遣わして下さった可能性を見て、彼に「あなたが幸せになったら、私を思い出し、ここから出られるように取り計らってください」と頼んだのです。これは問題のないことであり、むしろこのような場に私たちが置かれた場合、積極的に用いるべき道であるとさえ言うべきだと思います。

しかしヨセフの期待したことは起こらなかったという報告で、この第 40 章は閉じることとなります。最後の 23 節を読みます。「ところが、献酌官長はヨセフのことを思い出さないで、忘れてしまった。」ヨセフは献酌官長が牢屋を出て行った後、自分が救われる時は今か今かと待ち望んだことでしょう。物音がするたび、足音が聞こえるたびに、今日こそ私はこの牢屋を出られるのだと思い、ドキドキしながら扉の方に近づいたことでしょう。しかし三日経ち、四日経ち、一週間経ち、さらに日が過ぎて何も起こらなかった時、ヨセフは現実を受け入れざるを得ませんでした。献酌官は私のことをファラオに言わなかったのだろう。彼はたぶん幸せになって私のことを忘れたのだろう、と。この結果、彼はなお 2 年間、この牢屋に放置されたことが次の 41 章 1 節から分かります。期待した分、落胆は大きかったと思います。頼みとした人から見捨てられ、忘れられるというさらに残念な状況の中でヨセフはなお過ごさなければならなくなりました。

以上の箇所から私たちはどんなメッセージを学ぶことができるのでしょうか。4 つのことを述べて終わりたいと思います。一つ目はヨセフがこの後、2 年間も待ちぼうけを食わされたという事実は私たちにチャレンジを与え、また励ましさえも与えてくれるものではないかということです。あのヨセフも主の導きだと思ったのに、そううまくは行かなかった状況の中に相当の期間、置かれました。ただ時間だけが空しく過ぎて行くような状況に置かれたのです。しかしこれはこれまで創世記に登場した人たちに常に見られたものではないでしょうか。アブラハムは 75 歳の時に主の召しを受け、子が与えられるとの約束を受けましたが、何年待たされたでしょうか。約束の子イサクが与えられたのは、それから 25 年も後、彼が百歳の時でした。息子イサクも同様です。彼も子孫の約束を受けながら 20 年間も祈り続ける毎日を過ごしました。その子ヤコブもラケルを妻として得るために、7 年間不当に働かされた上、もう 7 年間働くことを要求され、さらに 6 年間、合計 20 年間もパダン・アラムにとどまることを余儀なくされました。このように族長たちはみないわば「待つ訓練」を受けました。人間が考えるタイムテーブルに従ってではなく、神のタイムテーブルに信頼して歩むことを学ばされて行きました。今日の私たちはともすると信仰がしっかりしている人にはすぐに良い結果が出るという誤った考えを持っているかもしれません。良い結果が現れるかどうかで、その人の信仰を測ることができるかのように。しかしヨセフの信仰に何か問題があったでしょうか。彼は主と正しい関係に歩んでいました。主は彼とともにおられました。そういう彼なのに監獄の中で何の動きもないような日々の中に置かれ続けたのです。これは私たちにとって

も励ましとなる事実ではないでしょうか。正しい信仰者でもこのようなことがあるのです。良い導きが見えず、ただ待たされるような日々を過ごすように強いられる時があるのです。

二つ目にヨセフはこの結果、救いは人からではなく、ただ神から来ることを深く学ばされることになっただろうということです。先に触れた通り、この状況で献酌官長に助けを求めたことは良いことであり、私たちのなすべきこととさえ言えます。しかしもしこの方法で救い出された場合、彼は神に感謝しつつも、自分の救いは献酌官によると神に帰すべき栄光をいくらか人に移したかもしれません。あるいは自分が機転を利かせてそのように彼に頼んだから、と自分に栄光をいくらか帰したかもしれません。しかし彼はなお監獄の中に置かれることを通して、自分の救いは人間にではなく、ただ神にのみ負っていることを深く学ばされることになったと思うのです。人間は忘れるが主は私をお忘れにならない方である。そしてご自身の最も良い時に不思議な御手によって救い出してくださる私の救い主であるということを深く学ばされることとなったのではないかと思います。

三つ目に、後の出来事に照らして分かることは、神のスケジュールは確かに完璧であるということです。ヨセフはもう2年間、牢屋で待たされますが、それによってエジプトの飢饉が始まる前に、王がそのことに関する夢を見た時に、この監獄から外に出ることになります。そして大きな働きをする者となります。もし献酌官長がすぐにヨセフを思い出していたらヨセフは直ちに監獄から出られたかもしれません。しかしその場合、監獄から出られたというだけのことです。後にファラオの夢を説き明かすチャンスを与えられたかどうか定かではありません。しかしもう2年ここで待たされることによって彼は大きな働きをする者とされます。つまり神は最も良いご計画に従ってヨセフを導いておられたからこそ、彼をまだこの監獄から出さないようにしておられたとさえ言えるのです。人には見えなくても神は完璧なスケジュールを持っておられ、そのご計画に従ってすべてのことを導いておられます。私たち一人一人の今日の生活も然りです。

そして最後四つ目に、その2年後において今日の章で見たヨセフの奉仕は報われるということです。一見、今日の章のヨセフの歩みは無駄に終わったように見えました。他の人を配慮し、その夢を説き明かす働きは徒労に終わったように見えました。しかしそうではなかったのです。ヨセフがここでこのようにしたことが2年後に信じられない形

で報われることになりました！もし彼がこの日、監獄の中でこのように仕える働きをしなかったら、2年後のこともありませんでした！彼のこの日の主の前の忠実な働きが2年後に想像もしていなかったレベルで大きく報われることとなったのです。私たちもこれを自らの励ましとしたいと思います。今日主に導かれて行く、主の恵みに応える忠実な歩みは、すぐにその報いが現れないかもしれませんが。自分のしたことはすべて無駄に終わったと思われることがあるかもしれません。しかしそうではないのです。今日の私の歩みは、主の定めた日が来れば大きく報われることになるのです。しかも全く考えてもみなかった仕方で、主はそのようにされるのです。ですから私たちは主に信頼し、主から力を頂いて、今日主の前に喜ばれる忠実な歩みをささげる者でありたいと思います。人々に忘れられ、また良い結果がすぐに出なくても、主も忘れておられると思う誘惑に屈することがないように。今の私にそう思えなくても、主は完璧なご計画を持っておられて、その下で一切のことを導いてくださっています。その主を見上げ、今日もともにいてくださる主からの力を頂いて、主の前に忠実な歩みをささげる者へ導かれたいと思います。そして主の時が来たら、主の恵みによって引き上げられ、今日私がした小さな働きが大いに報いられ、主の栄光のために用いられることに至るという幸いの中を歩む者とされて行きたいと願います。